

東書教育賞は教育現場を支援します



代表取締役社長

川畑慈範

主催者を代表いたしまして、一言お祝いとお挨拶を申し上げます。

第26回東書教育賞を受賞された先生方、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。また、本日は公私ともご多忙の中、休日にもかかわらず、またご遠方より贈呈式にご出席いただきましたこと、厚く御礼申し上げます。

今年は、新年度より9年ぶりに新教育課程が、小学校から完全実施されます。メディアが挙って「ゆとり教育からの脱却」と命名した新教育課程では、基本教科を中心に指導時間数、指導内容が増えています。「質量両面の充実」という国の要請に応えた教科書の分量も大幅に増えています。

このような急激な転換に、学校現場からは戸惑いや不安の声が聞こえてまいります。それは、ただ指導すべき内容が増えただけではなく、「知識基盤社会」への対応として、知識や技能の習得に加えてそれらの活用力を育てること、教科を横断する「言語活動」「道徳教育」「伝統文化」の重視、小学校高学年の外国語活動の導入などの新たな課題が課せられているからだと思います。

ある教育学者の方が、その著書の中で「教育には、あらゆる問題を解決する、無限の力が期待される」と書いておられましたが、私たちには、何か新しい社会問題が起こると、まずは教

育によって解決しようという教育依存、教育万能とでもいうべき考えがあります。

これまでも社会の変化に応じる形で、「環境教育」「情報教育」「国際理解教育」「消費者教育」等々、特定の教育課題が次々に導入されてまいりました。新しい学習指導要領でも、多重債務者の問題から「経済・金融教育」が、フリーターやニートなどの社会問題から「キャリア教育」が、裁判員制度の導入から「法教育」がというように、次々に新しい課題が課せられています。

さらに、指導内容を大幅に減らした現行教育課程では、その実施前に「学力低下」を招くという世論が澎湃^{ほうはい}として起こった経験から、カリキュラムは、そこに新しい課題を導入する際には、旧い何かを捨てるというスクラップ＆ビルドという発想を封じてしまいましたので、改訂のたびに新たなメニューが増え続けていく運命にあります。

また、家庭や地域社会の変容によって、学校は学習指導以外に、本来家庭が担うべき基本的な生活習慣や躾まで担うのが当たり前になってきています。こうした学校が担う教育機能の多様化によって、先生方はますます多忙を極めておられます。

昨年末に閣議決定された23年度予算案では、小学校1年生ですが、10年ぶりに学級編制標準の引き下げが盛り込まれました。一定の前進ではありますが、一方で、子どもたちの学

習意欲の低下、学力分布の二極化、家庭の経済格差と学力格差の高い相関などの学力問題もあり、依然として厳しい教育環境が続くものと思われま

す。このような状況では、いかに優れた指導力をもつ先生でもその対応力には限界がありますし、教育の結果が理想や目標に及ばないからといって、学校だけにその責任を押し付けるべきではないと思います。

最近、小集団で、子どもたちが互いに教え合い、学び合う「協働学習」が提唱されていますが、かつて学校が地域共同体の中心であったように、学校を核として、家庭（保護者）や地域（地域住民）が教育に参加する「協働学習」ならぬ「協働教育」にシフトしていかない限り、従来の課題にも新たな課題にも十全な形では対応できないような気がいたします。

すでに、保護者や地域の方の意見を学校運営に反映させるコミュニティスクールという取り組みが全国各地で行われていますが、ただ意見を述べるだけでなく、平生の教育活動にコミットする「協働教育」が必要な時代ではないかと思

います。あえて素人が口幅ったいことを申し上げましたには、理由がございます。後ほど審査員の先生方のご講評がございますので、ここでは一つ一つ論文のご紹介はいたしません

が、本日受賞された先生方の多くのご実践が、学級や学校の枠の中に閉じることなく、その枠を越えて、家庭や地域、さらに他の学校との連携による「協働教育」によって成果を上げておられると感じたからでござ

います。また、去年は「学校教育の情報化」が大きな話題になりました。デジタル教科書・教材を中心にした教科指導におけるＩＣＴ技術の活用、校務の情報化、情報活用能力の育成なども大事なテーマですが、「学校教育の情報化」において最も重要なことは、「協働教育」の環境づくりに、「時間と空間を超える」デジタル・ネットワークのメリットを活かすことではないかと思っております。ちなみに、本日受賞された論文の中に、すでにこのことを実践され、顕著な成果を上げられた報告がござ

います。改めて、多忙なご公務の合間をぬって論文をまとめられ、本日受賞された先生方、そして当教育賞にご応募いただきました多数の先生方に感謝申し上げますとともに、日ごろのたゆまぬご実践とご研究に心より敬意を表する次第でござ

います。弊社は今後とも、日々教育課題の解決のために真摯な研鑽を続けておられる先生方を応援してまい

る所存でございます。受賞された先生方におかれましては、引き続き東書教育賞にご支援を賜りますようお願い申し上げます。最後になりましたが、公私ともご多忙中、最終審査をご担当いただきました審査員の先生方、そして一次審査をご担当いただきました東京教育研究所主任研究員の先生方はじめ多くの先生方に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

また、本日ご出席いただきました報道関係者の皆様方に感謝申し上げて、簡単ではございますが、挨拶に代えさせていただきます。

受賞された先生方、本日は誠におめでとうございます。今後のますますのご活躍を心よりお祈り申し上げます。